



木藤亜也：著
幻冬舎文庫 定価 560 円（税込）

1リットルの涙 難病と闘い続ける少女亜也の日記

海 外の旅に出て1年近い。旅の間も、たまに出会う日本人と本を交換したり、借りたりしながら、本を読み続ける。旅に出ても読書量はそう変わらないが、本の選択肢が少ないため、読書ジャンルは大きく広がる。そうして出会ったのがこの『1リットルの涙』である。闘病記はもっとも苦手なジャンルで、普段ならまず読まない。この本を手に入れたからも後回しを繰り返し、読むものがなくなってからようやく読み始めたのだった。

途 中で止められず、一気に読んだ。涙が出た。でも、もうこの本を開くことはないだろうと読み終えて思った。やはり闘病の記録は苦手なのだ。しかし、なぜだか手放せず、この本をバッグの奥にしまい込む。本は重いので旅で持つのは3冊までと決めている。気に入った本をこの「ひろいよみ」用に1冊確保しており、これを持ったままだと交換できる本は1冊になってしまう。それでも手元に残し続けた。さて本の紹介を書くかと思ったとき、『1リットルの涙』が気になった。表紙が何かを訴えているように感じ、本を手にとると今度も止められず、一気に読んだ。そしてまた涙した。

運動に必要な神経細胞が徐々に失われてい

く難病に少女は罹っている。中学のころは運動神経が鈍い程度に考えていたのが、実は治療方法のない病気と判明。進行を止めることのできない病気で、人生これからという思春期の少女が、時とともに歩けなくなり、言葉も話せなくなり、寝たきりになり、最後は命が尽きるという未来を宣告されてしまうのだ。あまりに酷な運命である。病気の進行で手が動かなくなるまで日記を書き続けたのは、この日記が一つの支えとなっていたのだろう。そこから浮かんでくるのは、悩み、苦しみ、泣きながら、最後まで死を願うことなく、生きる努力をする少女の姿。「現実があまりにも残酷できびし過ぎて夢さえ与えてくれない。将来を想像すると、また別の涙が流れる」この締めくくりの叫びはあまりに悲痛である。

好 きな本は何度も繰り返し読み、とくに気に入った部分を何度も読む傾向が、私にはある。しかし、この本は今度こそ二度と開くことがないかもしれない。それでもやはり手放せないで持っているだろう。今度読むとしたら、それは何か大きな問題にぶち当たり、どうしようもなくなったとき、そのときには大きな勇気を与えてくれる本だと思う。だから平時には読みたくないし、読みたくないような状況にはなりたくない。でも読める場所に置いておきたい。そんな1冊。